

ドリアンスメルズライクティーンスピリット

卯月秋千

ちゃり……かちや。がっちゃがちやかちり。んぎいー、

ばたばたばたばたんばたん……きい……どんつばつちや。

深夜二時、一連の環境音が私の臉をこじ開けた。家宅侵入、窃盗、器物破損、そんな単語を連想する中、犯人の声が響く。

「ゴメえええンメリい……わたひ、ちよつと、よつちやつた！」

宇佐見蓮子が台所に引つ繰り返つたまま助けを求めている。呂律は全く回っていない。玄関からは脱ぎ捨てた靴がバラバラと散乱し、キッチンフロアリングにはだらしなく牛乳の海が広がっていた。おそらく足元もおぼつかぬまま脱ぎ散らかし、喉の渇きに任せて冷蔵庫のドアを開いて、そのままパツク牛乳を床に取り損なったのだろう。大惨事だ。

私は溜息をつきながら雑巾を取り出し、右手を動かした。規則正しい往復運動が、フロアリングに広がった乳白色を吸い取っていく。とは言え、彼女が飲みに行くと言った時点でこんな展開を予想はしていたので、形式だけの抗議を

ぶつけておく。

「遅くなるなら連絡して。今日はもう来ないと思つてた」

「ごめん……気付いたら、しゅーでんらくなつちやつてえ！ いやー、れもメリーのうち、遠いねえっ！ すっ

ごい歩いた。足が引きしまった気がするかも。カモシカ並みの足になつたかも？ カモシカかも。私、鴨？ 鹿？ あははウケる」

意味不明。一息ごとに煙草とアルコールが混じつた臭いが漂つてくる（蓮子には、酔うと喫煙する悪癖がある）。正直言つて醜態だが、そのあられもない様に、私の保護欲は刺激されてしまう。

「今のおあなたはカモシカじゃなくてウマシカよ。お馬鹿さん」

「ぶっ！ うははははははっ！ 何それメリーちよーおもひろい！ イケてる！ ナイスジョーク。ベストウイット。ベストキッド ホアターーーー！」

床に転がりながら怪鳥音を発しはじめた。もう何を言つても無駄だろう。私は瞳に慈愛を湛えたまま何度目かの雑巾絞りを終え、へたり込んでいる蓮子の足を拭いた（どこで汚してきたのか真つ黒だった）。

「ういー、あんがと。ねえメリー……私、私ね……実はずつと黙つてたけど、大事なこと言つてないの……聞いてくれ